「※ホラふき」と呼ばれても

今村明恒

二〇一一年（平成二十三年）三月十一日、東北地方を中心に大きな地しんがおきました。この地しんでは大きな津波もおこり、※約一万八千人もの人たちが亡くなったり、どこにいるのか分からなくなったりしました。

こうした大きな地しんや津波が、いつやってきても落ち着いてひなんできるよう、準備することの大切さを伝えるために、※生がいをかけた人がいました。

【今村明恒】

（東北大学出版会「君子未然に防ぐ　地震予知の先駆者　今村明恒の生涯」より）

※ホラふき
うそつき

※平成二十五年一月九日現在（警察庁発表）

※生がい
生まれてから死ぬまでの間

「これから五十年のうちに、きっと関東地方で大きな地しんがおきるはずだ。」

これは、一八七〇年（明治三年）、鹿児島市で生まれた今村明恒の言葉です。

一九〇五年（明治三十八年）、明恒は、これまでの地しんのおき方を研究し、その考えを雑誌に発表しました。この発表に、周りの人たちはおどろき、大さわぎになりました。

そんなとき、地しんについて研究していたある先生が、

「これから何百年も東京には地しんはこないだろう。きたとしてもそれが原因で大きな火事がおきることはない。今村

【関連年表】

一八七〇年　誕生

一八七五年
第五郷校（現在の松原小学校）入学

一九〇一年
東京帝国大学助教授になる。

一九〇五年
地震予測・防災の大切さを雑誌で発表

一九二三年
関東大震災がおきる。
東京帝国大学教授になる。

一九四八年　死去

くんの考えは、まちがっている。」

と発表しました。そのおかげで、さわぎは少しずつおさまっていきました。しかし、そのかわりに明恒は周りの人たちから「ホラふきの今村」と呼ばれるようになりました。明恒が本当に伝えたかったことは「地しんは、いつおきるかわからないので、もしものときのためにしっかりと※防災の準備をしておきなさい。」ということでした。しかし、雑誌には「大きな地しんがおきる」ということだけが取り上げられたので、明恒の気持ちが周りの人たちには伝わらなかったのです。自分が勉強していることは、社会のために役に立っている、

【生家と小学校】

明恒が生まれ育ったのは鹿児島市の新屋敷町です。小学生のころ通った第五郷校（現在の松原小学校）は、現在の天文館公園の所に建っていました。

※防災

地しん・台風などに対して、被害が大きくならないようにしておくこと。

だから自分がしなくてはいけない役目だと考えていたのでしょう。周りから「ホラふき」と呼ばれても、明恒は今までどおり地しんについての研究をし、防災の大切さを呼びかけ続けました。

明恒が自分の考えを発表してから十八年後の一九二三年（大正十二年）九月一日、関東地方に大きな地しんがおきました。この地しんであちらこちらが火事になり、十万人以上の人たちが亡くなったり、どこにいるのか分からなくなったりしてしまいました。明恒の考えは、まちがっていなかったのです。「自分はホラふきではない。」と大きな声でさ

【考えてみよう】

「ホラふき」と呼ばれるようになってからも明恒が地しんの研究や防災を呼びかけたのは、どうしてだろうか。

【考えてみよう】

自分の思いをもち続けるためには、どんな気持ちが大切なのだろうか。

けびたかったことでしょう。しかし、明恒は自分の考えをまちがっていると発表した先生を責めることもなく、ただ地しんのための防災がきちんとできていなかったことを悲しみました。このことをきっかけに「地しんの神様」と呼ばれるようになった明恒は、それからも地しんの予測や防災の呼びかけを続けました。

鹿児島でも一九一四年（大正三年）に桜島が大ばく発し、その後大きな地しんがおき、家が燃えたり、かべがたおれたりして、亡くなってしまう人たちがいました。この大ばく発を忘れることのないようにと、鹿児島市にある照国神社の鳥

【桜島】

（写真協力：（公社）鹿児島県観光連盟）

【桜島爆発記念碑】

【記念碑の裏】

居の近くには「桜島爆発記念碑」が建てられています。この記念碑には、桜島ばく発で町がどのようになったかということや、防災の大切さについて書かれた文章があります。この文章を書いた人こそ「今村明恒」です。戦争がはげしかったころにもかかわらず、みんなに防災を呼びかけていたのです。

わたしたちが日ごろ行っている「ひなん訓練」。そこには、防災の大切さをうったえ続けた明恒の強い思いが、こめられているのです。

【今村明恒と黒田清輝】

画家黒田清輝は、明恒と友達でした。清輝は、桜島大爆発の時、描いた絵を、研究のための資料として明恒におくりました。明恒死後、明恒の妻が鹿児島市立美術館へ寄贈しました。

【桜島爆発図（黒田清輝）】

（鹿児島市立美術館）